

西鄉隆盛

第四卷

海音寺潮

朝日新聞社

西郷隆盛

第四卷

海音寺潮五郎



西郷隆盛 第四卷

定 価 一八〇〇円

昭和五十一年十一月三十日第一刷発行

著 者 海音寺潮五郎

装 画 芹沢銈介

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社
東京・大阪
名古屋・北九州

西鄉隆盛 第四卷 目次

久光の京都帰着と意見具申そして帰国 3

土佐の進出と武市半平太の苦心 27

テロと弾劾はじまる 81

血風の季節 99

横井小楠の改革意見 122

会津藩主松平容保京都守護職となる 134

山内容堂と土佐勤王党 154

攘夷催促の勅使差遣 169

幕府の諸改革 186

江戸における開国鎖国の議論と長州藩の運動 190

勅使待遇問題と春嶽の辞職願提出 214

一橋慶喜という人 221

薩摩の反対運動 232

江戸における長州藩の運動と高杉晋作等の攘夷実行計画 239

高崎猪太郎を通じての久光の意見具申 265

慶喜再度の辞職願と安政年度の追罰 274

島津久光の京都守護職任命問題 288

勅使の入城 295

春嶽と久光・再び久光の守護職問題 300

勅書奉答と將軍の忠順 320

公使館焼打ち 333

横井小楠の奇禍・新徴組結成 340

薩藩の反急進運動

348

江戸における大久保の運動

376

大久保の運動の蹉跌

387

会津容保の京都赴任

399

一橋慶喜の上京

410

山内容堂と松平春嶽の上京

420

兩議奏の辞職・翠紅館の大会・青蓮院宮の還俗

429

山内容堂と松平容保

434

あとがき

453

西鄉隆盛 第四卷

久光の京都帰着と意見具申そして帰国

生麦の事変があったのは文久二年八月二十一日、その夜程ヶ谷に泊まった島津久光は、二十二日の朝程ヶ谷を出立、途中四泊して、二十六日に駿府に到着した。

その夜、幕府から急報があった。ひょっとすると、英国の軍艦が直ちに鹿児島に向うかも知れないというのである。

そこで、藩庁に知らせるために、松方助左衛門（正義）を急行させることにした。

松方は直ちに出發、大坂に急行し、海路をとって、薩摩西北部の阿久根港^{あくね}につき、ここから陸路をとって、閏八月二十八日に鹿児島城下に達して、藩主忠義に報告した。

久光の京都に着いたのは、閏八月七日であった。

生麦事変は、遭難の英国人等にとっては言うまでもなく、薩摩側にとっても不慮の災難であった。薩摩人等にとっては、習慣法によって、大名行列を犯した者は斬り捨ててもさしつかえないとの法理論を持つてはいるものの、この習慣法は日本人同士なら文句なく通用するが、相手が外国人であつてはただでは済まず、きつと面倒なことがおこるに相違ないとの不安はあつたはずである。だから、好んでおこしたことはない。そういう破目になって、やむなくおこした不慮のことだった。災難というゆえんである。

ここで考えたいのは、奈良原喜左衛門をはじめとして、数人ないし十数人の者が英国人を斬ったわ

けだが、その者共にたいして、薩藩が全然譴責も戒告もしなかったことである。「当然のことをした」と認定したから咎めなかったのであることは言うまでもないが、当時の日本の当面している外事問題に思いをいたせば、そう単純に割り切れるものではない。個々の藩士と違って、藩には国事の責任がある。こんな認定をして黙過したとは、単純すぎて、責任をわきまえているとは言えないと言われても、弁解の辞はないはずである。同情的に考えれば、何百年の間専心に養い立てて来た剛健敢為こうけんかんいの士風の自然の発露であるから、咎めることは出来なかったであろう。

ともあれ、藩の方針としては開国主義であるが、心情的には久光も藩士等も攘夷的なので、それもあってあんなったのであろう。つまり、原因は一つでない。さまざまなことが結んで、あの事件となったのである。

最も気の毒なのは幕府であった。ペリー来航以来の外国との問題といえば、頭痛の種でないものはなかったのに、突如としてこんな困難な事件がおこって、極度の困惑と苦悩におちいったのである。

しかし、責任のない世間は大喜びだった。もともと、薩摩人は勇敢と剛健の評判を昔からずっと保っているのだ、皆、案の定という思いがあつて、薩摩藩の勇敢と果斷とを言いはやし、島津久光の評判は益々高くなった。

後の山階宮晃親王は、当時は法親王で勅修寺宮かんじゆじのみやと言つたが、七言絶句をもつて生麦事変を詠じて、久光の勇斷と武威とを讚美された。

薩州の老将 髪 冠を衝く

天子百官 危難を免かる

英氣凜々 生麦の役

海辺十里 月光寒し

まずい詩だが、これが大評判になったのだから、当時の人心と久光にたいする評判とが、よくわかる。

勅使大原重徳は、久光に一日おくれて江戸を出発して品川まで来た時、生麦事件の勃発の報に接し、品川に二泊したが、着京は久光より一日早い閏八月六日であった。一日早く着京したのは、宮（熱田）から桑名までの間で追い越したらしい。『大久保日記』によると、久光はこの間を渡船でわたらず、陸路をとり、しかも宮で一日滞在しており、その宮で、大原の家来という名目で大原に随従して山科兵部という名になっている吉井幸輔が大久保を訪ねて来ているから、この間で追い越したことはほぼ確実である。定めて大原と久光との間にも談話があったことだろうが、それは記録にのこっていない。

大原は京に入ると、直ちに参内して、天皇に謁見して復命した。天皇は御満足で、功を賞し、やがて大原に直衣着用を許された。権威者というものは、妙なことを特権にするものだ。幕府にも諸藩にもそれはあって、たとえば幕府では諸大名の挾箱はさみばこにつける紋を金紋にすることも特別な待遇になっており、薩摩藩では名前に「久」の字をつけるのが特別な待遇になっていた。この時代の朝廷では直衣を着用することが特別待遇の一つになっていたのである。要するに費用をかけないで名譽をあたえて済まそうというのである。現代になって、年金のつかない勲章をくれるのも、同じ発想である。

島津久光はこの翌日、閏八月七日に着京し、旅装のまま近衛邸に参上したところ、道筋にあたる三条通り、寺町通り、今出川、中立売御門、さらに近衛家の裏門まで、久光の行列を見ようと、貴賤老若が多数出ていて、乗物がやっと通れるほどの賑わいであった。御所近くのあたりには下位の官女な

どまで見物に出ていたので、後乗として駕籠で随従していた大久保が、「実に恐れ多く、何とも言語に尽し難く、夢中の気持であった」と日記に書いている。つまり、久光は一躍、時代の大スターとなつたのである。これは勅諭を奉じての公武の間の周旋がとにもかくにも成功した功績による点ももちろんあろうが、大部分は生麦事件による怪我の功名によるのであろう。人気というものは、今も昔もおかしなものである。

さて、近衛邸につき、近衛父子に面会した後、すでに近衛邸に来て待っていた議奏中山大納言忠能、正親町三条大納言実愛、野宮宰相定功の三人に会って談話した。もちろん、話題は江戸におけることの報告である。議奏等は、

「明後日九日に、御用の儀がある故、参内いたすように」
との内勅を伝えた。

日の暮れる頃、辞去して、錦の藩邸へ帰った。

このように、朝廷の覚えといい、世間の気受けといい、上々の首尾である。久光の満足想うべきものがある。

翌々日、久光は午前九時頃、正式の供揃えで、近衛家に参上して、控えの座敷に通されて待っていると、間もなく青蓮院宮と三条少将実美とがやって来た。久光は近衛父子へ対面した後、青蓮院宮と三条とにも対面した。

やがて控えの座敷で中食を供せられた。

午後四時頃、この日近衛家から拝領した直垂に着がえて参内したが、その際関白忠熙は自分の烏帽子をくれ、左大将忠房は自分の履をくれたのだから、久光はすべて近衛家からの拝領品で装って、参

内したのであった。久光は大功はあっても、無位無官だから、小御所で正式の拝謁は出来ない。御台所御門から入った。

この御門から内は、内用人兩人、近侍八人、草履取一人以外は召し連れることは出来ない。だから、内用人として小松帶刀、中山次右衛門、近侍として中山中左衛門、大久保一藏、谷村小吉、木藤角太夫、奈良原喜左衛門、海江田武次、相良量右衛門、本田弥右衛門の八人、このなかの中山中左衛門が太刀持ち、大久保が定差持ちをつとめた。吉井幸輔は草履取となって従った。

奏者所の御玄関から上って、かれこれあって、長橋局の西廂へ通ってひかえていると、天皇が上段に出御された。議奏三人、伝奏坊城大納言俊克が席へつめた。先ず坊城が、関東での経過を言上し、つづいて議奏衆からも奏聞した。

その後、一旦入御された後、また御出御になった。

議奏等は、

「奏聞を聞こし召されて、叡感浅からず思し召されるぞ」

と告げた。そして、中山忠能の取次ぎで、真のお太刀（正式の拵えをつけた太刀）兼広を賜わった。

終って、控え所まで退って来ると、お菓子を下賜された。

午後五時頃、御所を退出して、また近衛家にかえって、湯漬の馳走になった後、近衛父子に会って、錦の藩邸へ帰った。すでに午後十時になっていた。

第三巻で書いたように、久光が江戸にいる時に、天皇は、久光を島津家の家督をつがせて薩藩主とし、従四位上中將にしたいから、幕府はよろしくそれを推薦するようにとの叡旨を近衛閑白に告げ、近衛は諸大夫進藤式部を江戸へ下して、大原重徳に通じた。このことの根元は久光の意志によることで、久光が家臣等をして近衛家を通じて天皇に働きかけさせたのだが、ともかくも天皇はお聞き入

れになって、叡旨として発動したのである。大原は叡旨でもあり、久光のために尽したくもあって、努力を吝ま^{おし}なかつたのだが、幕府は動かかなかつた。そのうち、堀小太郎の事件が起こつたので、久光はあきらめて、運動をやめた。

だから、朝廷のこの御優待は、その埋め合せの意味もあつたかも知れない。無位無官の者には先例のない優待であつた。

上述のように、久光にたいする朝廷の空気は最上々であつたが、実をいうと、それは天皇と上級公家の空気であつて、一般の公家、そしてまた当時京都におびただしく集まっていた浪人志士等の間の人気はそうではなかつた。この人々は、新たに長州藩の唱え出した純粹攘夷説に共鳴して、攘夷説はなかなかの勢いとなつていたのである。

一体、開国説も攘夷説も、根源は恐怖感情からはじまっている。開国説はやがて最も理性的なものになつたのだが、攘夷説は最後まで感情から脱することが出来なかつた。攘夷感情をあり立てたものの中には、貿易によつておこつた金貨と銅貨の流出による通貨不足の不景氣と物資買占めによる物価騰貴などによる国民生活の圧迫がありはしたが、根本的なものは欧米勢力にたいする恐怖感情と欧米人にたいする嫌惡感情とであつた。

感情であるだけに、国民にアピールする力は開国論よりずっと強いのである。そこへ持つて来て、天皇が最も強烈な攘夷家であられるので、天皇への忠誠心と一緒になつて、一層盛んになつた。理論的には、尊王攘夷と同じく尊王開国もあり得るはずであり、佐久間象山や横井小楠のような人も実在したのであるが、この時代の世間は尊王開国というコンビを認めなかつた。尊王ならば必ず攘夷でなくてはならず、開国ならば佐幕のはずと考へていた。それは天皇が最も熱心な攘夷家でおわしたため

である。

京都の空氣がこうなったもとは、長州藩が藩の方針を百八十度転換して、開國論を根本にした公武合体説から純粹攘夷論に切りかえて、徹底的に天皇のお志に殉じたいと上申し、それを天皇から嘉賞されたところからはじまり、七月下旬、土佐勤王党が藩主山内豊範を擁して入京して、長州の藩論に同調したことによって、益々さかんになったのである。久光にとっては苦笑するより外はなかったろうが、生麦事変も拍車をかけたに相違ないのである。忘れてならないのは、寺田屋事変によって、浪人志士等の人氣がすっかり薩摩藩を離れ、その反動として長州藩に集まったことである。

久光が江戸から帰って来たのは閏八月七日だ。長州藩が藩の方針の変化を朝廷に申し上げてからほぼ二月、山内豊範が京都に入ってから約一月半である。その短い間に、京の一般人氣はがらりと変わったのである。

久光は江戸にいる間たえず京都藩邸と連絡をとっていたから、京都の情勢はある程度想像がついていたが、想像は実情にはるかに及ばなかった。自分の功績を認め、自分に感謝し、自分を賞美しているのは、天皇と高級公家だけで、大部分の公家と一般志士等は、自分より長州藩と土佐藩とを高く評価し、これに強い望みを囑していることを、いやでも知らねばならなかった。

「またしても、長州め！」

と、久光は最も強烈な怒りと憎惡とを感じずにいらなかった。

彼は朝廷内に攘夷催促の勅使を江戸に派遣しようという動きのあることを知った。それが長州藩と土佐藩の提唱からはじまり、朝廷内にあつてこれを主張し、推進しているのが三条実美や姉小路公知等の少壮公家らであることも知った。当時三条は二十六、姉小路は二十四という若年だ。同志の公家等もおつかつの年だ。久光には、長・土の両藩はこのような年少の公家らを抱きこんで、思うが

ままだに朝議を繰っていると思われなかった。

「宮方や上流の公卿方もだらしない。いい政治が出来るように、おれが幕府を処理して来たのだから、しばらくは様子を見ているべきである。そう言って、少壮公家をおさえつけるべきである。ばたばたとさわぐなど見苦しい。大体、朝廷はこの頃、諸大名等が急にチャホヤしはじめたので、のぼせ気味になっていなさる」

と、にがにがしくてならない。

この気持が、帰京の翌々日、即ち参内の当日だ。次のような意見書を草させて、議奏・伝奏の両識に提出させた。

一 この度京都に帰ってまいりまして、関東での次第を尊卿方へ、くわしく言上いたしましたところ、格別なる歎慮をもって参内を仰せつけらるるとの旨をうけたまわりました。微賤の身として、実に恐れ多く存じ奉りまして、再三、固辞いたしましたのが、是非お受けいたすようにと、強^たって尊卿方から仰せ聞けられましたので、やむを得ずお受けして参内いたしましたところ、尊卿方をもって、関東での様子を逐一御尋問あらせられ、殊に重きお品まで拝領を仰せつけられました、まことにもって武門の面目であります。恐縮いたすよりほかなき有難さで、筆紙をもって申しのべることは出来ません。この上は不肖の身の全力をふりしぼって益々尽力いたす心底でございます。

つきましては、恐れながら唯今の朝議の大略をうけたまわりましたところでは、諸国の大名等にして公武のおんために周旋することを願ひ出でている者共には、皆朝廷から御内命を仰せつけられている由であります。これは天下の人心を失わせないようにとの御評議によることでありま